

暫くして私の連れの郭如林が家に鍵を取りに戻った男の子と共に駆けつけてき、子ども達は再び苦勞の多い旅に出発しました。時間は10時半で、家を出てからすでに1時間半になります。

細く蛇のようにくねくねと続く山道を私達一行は道なりに連なって進んで行きます。足元には相変わらず黄河が流れていますが、岸辺の僅かな斜面に雑草が生えていますので心理的にはかなりの安心感があります。岩崖を上る時は、子供たちは手と手を繋ぎ、上に行く子は下から来る子を引っ張り、下の子は上の子を押し上げ、それが当たり前のようにお互いに助け合っています。

一行は前へ進んで行きますがみんなあまり話をしません。私が一緒だからかもしれませんがなにか堅苦しい感じですが。11時半、よく知られた乾坤大湾に到着しました。山の上に碑が立っているのが遠くに見えます。郭如林が石碑のところで休もうというので子供たちを石碑のところで皆一緒に記念撮影の後、学校でお腹が空いた

時に食べるために持参のオヤツをそれぞれ出し食べました。

多数の子供たちは前日自分の家で作った‘^{miàn gēda}面疙瘩’（小麦を練ってビー玉状に丸め、黄土と一緒に炒ったもの）を出し、又ある子は‘^{guā zǐ}瓜子’（カボチャやひまわり、スイカなどの種を炒ったもの）を出し、私も皆に^{なつめ}俵の実を出しました。私が俵を持ち歩くようになったのはこの地に来てからです。私は幼い頃から1日3食の習慣ですが、このあたりでは農家も学校も1日2食の食事なので、日中の飢えを満たすささやかなものを用意しているのです。この地で盛んに採れる俵は正にぴったりで、お金もかかりませんし、どの家にもあるので好きなだけ取り、袋が一杯になればそこで止めるという具合です。

子供たちは俵は食べ飽きていて、皆‘面疙瘩’を食べました。‘面疙瘩’は外側が硬く中は柔らかくてかすかな甘みもあり口当たりも良いのですが、黄土を用いて作るということは知りませんでした。前日、伏羲河村のそれぞれの家で作っている所へ折りよく出くわして知ったのです。

‘面疙瘩’を作るのはこのあたりの風習で、正月30日にだけ作られますが、‘百病を炒り去る’という意味合いがあり、子どもが食べるとおできが出来ないし、百病を治すといわれています。小芳は気が利く子で、何粒かの‘面疙瘩’を残して私に味を見させてくれました。

乾坤湾を出発し私達はもう黄河の岸に沿っては歩かず、今度は山の深い亀裂に向って進んで行きます。しかし、まだ10里（5キロメートル）ほどしか歩いていません。前途ははるかに遠いのです。

私達が山間の谷を下る時になると、男の子達は遂に野性むき出しになり、手綱を逃れた野性馬となってもうもうと土煙を巻き上げ女の子達を残して山を駆け下って行きました。私が叫んでも止められようもなく、追いかけて追いつけるものでもありません。路はどうにか険しくなくなりましたが、しかし、山を登り、坂を下り、丘を駆け、崖を上りこれまで同様十分体力の消耗がつづく路です。今度はそれほど歩かずすぐに^{huái bō gē lǎo cūn}槐卜圪崂村に着きました。この村は閑散とした村で、僅かに10軒ほどの人家があるだけです。

村の入り口に着くと子供たちは次々と一軒の家に入って行きます。しかもその窑洞の入り口の前にカバンがいくつか置いてあり、その家（^{yáodòng}窑洞）の中からはぺちゃぺ

^{miàn gēda}
〈面疙瘩を作る〉



小麦粉を捏ね、細く延ばして小さく切り丸める



黄土層の深くから掘り取ったきれいな土を篩にかけて鍋に入れ加熱、用意の小さな小麦団子を入れて赤みがでるまでしっかり炒る。香ばしく歯ざわりもよく、かすかな甘みもあって美味しい。



山頂で一休み 皆でおやつを食べる楽しいひととき

ちゃという話し声が聞こえてきます。突然、入り口にかけられたカーテンをめくり上げて、同行の子供たちと年差のない子どもたちが何人か出てきました。よくよく見るとよく知っている顔です。訊いてみるとやはり伏羲河村の子供たちで、彼等は一足先に出発していたのでした。時刻は12時20分になっていました。

郭如林の説明で納得ゆきました。この家の人は、おじいさんもおばあさんも親切な性分で、家(窑洞)が道端にあるので伏羲河村の子供たちは学校の行きかえりの途中、皆ここで足を休め水を飲むというのが何年も前からの習慣になっているのだそうです。親戚でもなければ縁故があるわけでもありません。面白いことに同行の子供たちの中にはこの近くに親戚やお祖父さんお祖母さんが住んでいても、そこに行って休んだり水を飲んだりせず、皆と一緒にいたいのです。私は子供たちに、「外にも休んだり水を飲んだりするところがあるの」と訊いて見ましたが、「この家だけ」とのことです。勿論、途中でお腹が空き喉が渴けばどの家でも助けてもらうことは出来ませんが。

二組が合わさって一隊となり全部で14人になりました。速度は更に落ちて私達はゆっくりと前進して行きます。普通なら男の子は間違いなく前方を歩き、女の子は後ろに置いてゆかれてしまうと郭如林guō rú línは言います。が、今日は私が隊伍に加わって、話をしたり写真を撮ったりするので、皆一緒に賑やかです。山間の平地を越えると土家洼村tǔ jiā wā cūnに着きました。槐卜圪崂村huái bǔ gē lǎo cūnと土家洼村はそれほど離れてはいません。せいぜい20分ほどなのですが又休み始める子どもがいます。ある子が坐ると、みんなもてんてんばらばらに道端に坐ってしまいます。

連れの郭如林は伏羲河村の人で、子供たちとよく知り合っていますので、子供たちをからかい始め、一人一人に今年のお年玉はいくらだったか問いました。50元という子もいれば、20元という子もいます。芳芳は今年14

歳で、朝起きてみたら家族が芳芳の枕の下に14元を入れて置いてくれたので、もう嬉しくたまらなかったそうです。それで素敵なペンを買ったのだそうです。

一緒に歩いている女の子たちの中に一組の姉妹がいます。ずうっと何も話さず、特にお年玉の話になった時は全く口を閉じてしまいました。2000年の春、伏羲河村で三輪車の事故があり、3人が死んで8人が怪我をしました。死んだ3人の中にこの姉妹の父母がいたのです。同時に父の愛と母の愛を失った姉妹の悲しみがどんなだったか想像にあまりです。

子供たちの休憩には理由があります。この後直ぐ土家洼深溝を越えなければいけないのです。この溝は深いばかりではなく急勾配でしかも険しいのです。ここを越える時、私は毎回体中汗びっしょりになります。こちら側の山の上から谷の向こうの山を眺めると、向こう側は更に険しくて斜面は45度以上あり、200m以上も登るのです。ここを越える必要のある大人はみんなその大変さに怖気づいてしまうのです。

この険しい道は捷路砭jié lù biǎn注*に続きます。私は真面目に写真を撮らなければいけません。私は大部隊と離れ、眺めのいいところを選び、寒風の中でカメラの三脚を立てました。ふと見ると対面の山の上の小さな影が見えます。ついさっき私の周りで元気よくとんだり跳ねたりしていた子供たちです。もうそれぞれ小さな虫になって稜線の上を動いています。子供たちは道なりに、纏まったり、ばらばらになったりしながら、山の上部の石崖の辺りまで登ると、約束どおり座りました。子供たちはそこで私を待っているのです。私は大部隊を追いかけてゆくしかなさそうです。

*捷路砭jié lù biǎn崖に沿った道。危険だが山を廻らずに済み近道になっている。

私は郭如林の助けを借りて、早足で山の麓に下りると45度近い、所々雪の張り付いた斜面を登ってゆかなければなりません。子供たちはまだ待っているのでしょうか……私は綿のようにふにゃふにゃになった足を頼りにやっと山の頂に辿り着いた時は私も弁解の余地なし道端に座り込んでしまいました。時間は午後1:10です。

隊伍の中で慶慶の年齢が一番小さく、彼女は去年やっと郷の小学校に進級したばかりなので体力が十分ではありません。何度も真っ先に休んでしまいます。慶慶は私がこれまでずっと撮影を続けている子どもで、活発で明るい、特に嬉しい時の、あふれ出てくるような笑顔は人懐こく可愛らしい女の子です。勉強のためにこの

子は実に十何斤(5~6キログラム)の重いかばんを背負って40里余り(20キロメートル以上)の山道を年上の子供たちと一緒に谷を下ったり山を登ったりしているのです。どんなにか大変なことでしょう。

隊伍はだんだん長くなり、歩調もゆっくりになりました。丘陵をもう一つ越え、山間の小道を抜けました。隊伍は再び休憩します。丁度午後の2時です。子供たちの気分を転換し元気づけるために、私はビデオを巻き戻して、撮影した映像の一部を見せてやりました。子ども達は元気を取り戻し、それぞれ頭を伸ばして、押し合い、押し合いしながら自分の姿を争って見ようとします。よく見ると途中で加わった一行の槐卜圪崂村huái bǔ gē láo cūnの何人かの男の子と北山村の5人の女の子達もいます。特に改改と呼ばれる女の子は、私が何年か前から追跡撮影の対象にしているのです。



更に20分近く歩くと一行は又休憩です。「千里の道のりには軽い荷はない」といわれています。子ども達は背に重いカバンを背負っているのを見れば全くよくぞ思いこそすれ何も言えはしません。私と一緒に‘捷路砭’を歩いた彩琴、転琴姉妹二人はカバンの持ち手を片方ずつ持って、大きなカバンを力を合わせて運んでいます。転琴の杖はもう捨ててしまっていました。しかし、カバンの中には自分の本もあるので運ばないわけには行きません。まして、これまでの道のりはお姉さんが背負ってくれたのですから。

子ども達が下ろしたパンパンに膨れたかばんを私が手にしてみるとビックリするほど重く、触ってみると本ばかりではないようです。子ども達が言うには、それは‘干馍片’‘面疙瘩’の類で、しかも漬物を眼一杯詰めた瓶も入っているのです。この漬物瓶は大切なもので、子ども達の一週間9回分の食事の唯一のおかずなのです!私は子ども達に「漬物を全部食べてしまったらどうするの」と訊いてみますと、「買うよ」という答えが帰って来ました。「何を買うの?」一番安くて簡易包装の‘酸辣片’は一角で一切れだそうですが、おそらく街では売れないような劣悪な食品なのでしょう。子ども達はお父さんがくれた一週間2元の小銭を懐にしているのです。

私が孤児の姉妹を見ますと、二人はいつの間にか深く頭を下げています。そうです!誰が二人の面倒を見てい

るのでしょうか?聞くとところでは学費も滞っているとのことです。

再び歩き始め、私は郭如林を後ろに連れて行くと姉妹に渡して欲しいと20元を彼に託しました。私は出来るだけ人に気づかれるのを避けたいのです。如林は妹はまだ小さいので事情を呑み込んでないけれどお姉さんはきっと辛い思いをしているでしょうと言いました。

一行は間もなく劉家山村にさしかかり、如林は村で用事を足すため暫く私と分かれますので、彼はお姉さんにこっそりとお金を渡し、案の定、遠くですすり泣く声が聞こえてきました。

一行は劉家山村の入り口を過ぎ、気が付くと、私の写真フィルムが間もなく終りそうで、それにも増して困ったことにビデオの電池も終わりそうになってしまっていました。一緒に土崗中心小学

校まで行くという計画はここで終りにするしかありません。しかしまだ気持ちがあるのでもう暫く子ども達と一緒に行くことにしました。あまり遠くないところに難坡湾という素晴らしい展望のポイントがあり、取り囲む山並み、谷、車の路筋が見渡せます。ここから歩いて40分ほどで学校に到達するでしょう。

難坡湾の大登りは登ることだけならどうにかできても下るのを臆するような急坂で60度はあります!しかし子ども達は入り乱れて果敢に下って行き、しばし土ぼこりが辺りに舞い上がったかと思うと、瞬時に子ども達の大部分は山裾に着いてしまったようでした。私は“気を付けてねー”と大きな声で叫びながらも、シャッターを押し続け、彼等が軽々と飛ぶように山を下る姿を写しました。と、私の眼の端に人影があって振り返ってみると孤児の姉妹ともう一人の女の子が私と話をしたい様子です。お礼か何か言いたかったのでしょうか。私はこの類の話は聞きたくはないし、涙は見たくないし、どっちみち私がしたことはほんの些細なことなのです。私は何も気付かなかったように大きな声で追いやって、一行に遅れないよう急いで行くよう促しました。彼女達も山の下へと駆け下って行きましたが、お姉さんの方はまだ時々振り返っては手招きします。見ると真っ赤な林檎を手に、手を振っているのです。